

此う思つてゐるのだらう。

それで榮治と二人で後から従いて来る。

寸時酒屋へ寄つて黒石は、ウイスキーの小瓶を買つて僕に呉れた。

それもマントのポケットに藏ふ。

『斯うして僕の死を見届ける迄の用意だな、彼等は何處までも効利主義だ』

横丁の角へ折れて二人は、

『高橋君さよなら』と言つた。

ずつと後から追つて来る氣だらう。

女子大學の坂を下る。

南無ダダの宣傳旗は、風に翻へる。

女子大の生徒は僕を見て、クス／＼笑つて行き過ぎる。下から澤山上つて来るのだ。

僕は電車の終點の活動寫真館の前で、第一聲を放つた。

——南無ダダ、ダガバジマクワアウリ——。